

第57号 50円

昭和53年11月25日

内容

生活と教育	1
千人会	2,3
寄付金報告・寄贈図書	4,5
第99回大学共同セミナー	6
多摩の丘の自然に学ぶ	7
事業部だより	8
ある日の国際交流点描	9
交友館から	10
館長日記から	11
利用状況	11,12

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
 <所在地>
 東京都八王子市下柚木
 (☎192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 74590番
 <東京事務所>
 東京都中央区日本橋本町3-3
 三井銀行本町支店ビル5階
 電話 東京 (241)3961
 編集・発行人 飯田宗一郎
 製作 中央公論事業出版

今日の社会をみてまず第一に感じることは、国民の大部分がサラリーマン化していることである。それまで請負い制を特色としていた日本の農村社会では、武士以外に俸給生活をしていえるものはいなかったのだが、今から四〇年ほど前、昭和10年頃の大きな社会変動によって今日のサラリーマン社会が形成されてきたのである。普通の歴史教育では日本には農奴制が支配してきたと教えるが、むしろ請負い制が古くから発達してきたのが日本の特色といえる。例えばの職(給与のようなもの)になっており、この請負い制が農村では小作とよばれてきた。この小作制度が下敷きとなって日本の近代化が進められたことは、今日の独占的大企業を支えている膨大な下請け会社の存在をみてもあきらかである。しかしなお、サラリーマン的な終身雇用の関係が非常に一般化してきたことが近年の大きな特色なのである。そのような雇用関係がわれわれの生活の中に確立してくると、生産は職場で生活は家庭でというように、生産と日常生活が切り離される結果になる。

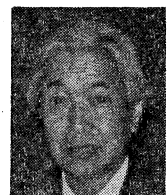
ところで、この切り離されたものに、もうひとつ重大な影響を及ぼしたものがあつた。水道の普及がそれである。各戸に水が配分されることによってかつての井戸仲間が分散し、都市の性格が根本から変わっていく。今から三〇年前までは用水区域をひとつの領域として、使う水、飲む水をとおして人の生活が営まれていたのである。しかし水が自由に入り込むようになってからは、人と人との結

び付きが失われプライバシーを守るなどというように、われわれの生活はつましやかで閉鎖的な傾向をとるようになってくる。それに比べて古い日本の民家は、もともと非常に開放的なものであつた。よく農村社会は閉鎖的であつたなどというが、赤土の瓦葺の村で、せいぜい村落共同体が生きていくうえに欠かれない共有地の共同管理という課題が閉鎖的であること、それがムラ共同体の特色だったのである。今日の家の機能は消費と団樂のみが中心になつてはいるが、かつての日常生活の中には生産と消費が離れがたく

結び付いていた。家はまた付き合の場でもあつた。結婚式も法事も家で行われた。縁側はコミュニケーションの場、土間や庭は作業場でもありその作業には誰でも加わることができたのである。家における生産と消費の結び付きの変化は、土間面積によつても知られる。大正から昭和の初めに東北地方に建てられた家では土間の面積が建物全体の三分の一であるが、江戸時代には家ではそれがほぼ半々になつてゐる。古い時代ほど家が生産の場として使われていたのである。

このような生活の中では、子供たちは自然、親のしていることを学んでいくことになる。当時の教

育には躰という非常によい言葉があつた。人間としてこれだけのことは守る、これだけのことを覚えておきさえすれば他人に迷惑をかけることはない、どこへ行つても一人前で通用する、それが躰であり家庭での教育であつた。子供が何かをしているとき、もしアゴを出していたら親は非常に叱つたものである。アゴを出すのはそのま



生活と教育

日本観光文化研究所所長

宮本常一

彼らが二〇歳位になつて一人前の年齢に達すると、それから先の教育は躰とはいわずに稽古と呼んでいた。「花伝書」の中に「生涯稽古條々」という言葉があるが、とにかくあるひとつのことを奥深く突き進めていくために必要な独自の作業、それが稽古であつた。例えば全国に優れた弟子を輩出させた備中の山田方谷という学者がいたが、長岡藩を建て直した河井継之助も彼の教えを乞うたひとりである。ところが山田方谷は継之助にたいして一度も講義などしてこ

へ行くといふ酒が出る。この酒を一

練があつた。彼らが二〇歳位になつて一人前の年齢に達すると、それから先の教育は躰とはいわずに稽古と呼んでいた。「花伝書」の中に「生涯稽古條々」という言葉があるが、とにかくあるひとつのことを奥深く突き進めていくために必要な独自の作業、それが稽古であつた。例えば全国に優れた弟子を輩出させた備中の山田方谷という学者がいたが、長岡藩を建て直した河井継之助も彼の教えを乞うたひとりである。ところが山田方谷は継之助にたいして一度も講義などしてこ

緒に付き合う。教育はなにも机に向かつてやるのではなく日常生活の中でやる、これが当時の教育であつた。そして旅へも出す。継之助は継之助で師の知らぬ間に、重要な書物はきちんと夜中に書き写しておいたといふ。与えられるのではなく求めたもの、それが学問であり稽古であつた。この河井継之助はたいへんな経営の才を与えられ、すぐに長岡藩を建て直しているが、維新政府は幕府方についてこの藩を、城跡も見られないほど徹底的に崩壊してしまつた。しかし彼らの精神はけつして崩壊はしなかつたのである。長岡の藩士が食えなくなつて支藩から百俵の米をもらったとき、彼らはそれを食わずにもう一度学校をつくつていくのである。あれほど惨い仕打ちに合つてもその中から立ち直つていくのは人間以外にないという自覚を、継之助は長岡周辺の人たちに植え付けてしまつていたのである。同様に方谷の弟子で維新政府にたたかれた会津藩士たちも各所にすぐれた業績を残している。そこには、つぶされてもおお微動だにしないエネルギーが残されていたのである。これが稽古の本来の姿である。一人前になつていった人たちの本當の姿がここにはある。

このように、あるレベルまで達するとあとは自力で努力するといふのが日本の古い教育の特徴であつた。しかもその教育には躰や稽古といった堅苦しいものばかりでなく、遊びといふ緩衝地帯がきちんと用意されてゐた。今でも遊びというて罪悪視されがちだが、日

(2ページ目へつづく)

千人会

昭和53年6月9日

●八王子に千人同心の志士ありて西からの侵入を防ぎ、かくして江戸の守りは堅く、徳川幕府は長くつづいたという。
 ●大学セミナー・ハウスに千人会の同心あり、人は万人の会になることを望むという。万人同心の守りありて、国公私立大学の広場が、すこやかに育ち、長くつづいていくであろう。

◇現在会員は一、五四〇名です。

大学人Ⅱ 一七二名
 社会人Ⅱ 三六八名

◇新しく会員となられた方々

- 15名第44回報告(申込順)
 C 東京工業大助手 平田道憲殿
 A 笹山診療所所長 岡田和美殿
 B 埼玉県公務員 松井共子殿
 C 東京学芸大講師 伊藤一郎殿
 C 御茶の水キリストの教会
 牧師 小幡史朗殿
 A 東京大学教授 小内 力殿
 C 横浜市立大教授 柳下 勇殿
 B 原病院院長 川原啓美殿
 B 日本駐車場工学研究会
 城 範子殿

◎先日の共同セミナーに参加させていただき、大変勉強になりました。これからの機会があれば、セミナー・ハウスを利用したいと思えます。

◇東京工業大学助手 平田道憲
 ◇会費ありがとうございます
 昭和53年6月9日(敬称略)

- A 東京大学助教授 加藤晴久殿
 B 長野工業高等専門学校教授 鹿島健次殿
 C 千葉商科大学専任講師 菅沼憲治殿
 A 東京理科大学教授 石井竹松殿
 B 農業 石井竹松殿
 B 成蹊大学助教授 中里明彦殿
 ◇入会のことば
 ◎卒業にあたって、学生年輪の会から移行いたします。
 日本駐車場工学研究会 城 範子

◎私たちの年代には物心ついた時からすでに戦争、敗戦後は生きるのが精一杯の時代でした。苦しい学生

- 生活を送り返って、今の学生、これからの若者たちにはあんなみじかくな青春の過ごし方をしてもらいたくないと願うのは、私一人だけではないでしょう。診療所十周年を期して入会させていただきました。 笹山診療所所長 岡田和美
- 大塚博、鈴木正紀、松崎奈岐、長谷川健介、竹内喜夫、阪本泉、榎田信男、関口忠、高橋忠次郎、早坂泰次郎、大籠まり子、藤井耕一、田中未来、北都子、芳野耕一、阪隆正、峰岸純夫、佐藤滋、樋口美智恵、板倉譲治、大村晴雄、前田護郎、道喜美代、小倉充夫、古畑和孝、鶴見和子、和田英一、望月継治、津田慶子、上野芳夫、岡田正弘、荒井基、松井源吾、佐藤進、中村幸安、片岡清子、佐竹寛、岩橋宣隆、石井修二、北野美枝子、江沢洋、杉浦明、益子正己、柳田博明、大野泰雄、藤野登、市井

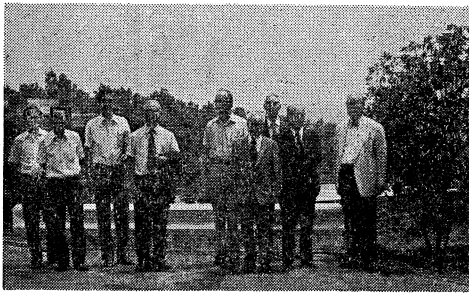
- 三郎、秀村欣二、長清子、大井鉄郎、鳥海俊宏、西川治、中村哲哉、百瀬宏、松井共子、嶺哲之助、長澤孝廣、朱牟田夏雄、中川作一、柴田恭三、川田侃、栗林恒雄、太田秀通、福富啓泰、長岩寛、笠松章、野田一夫、青木郁朗、白井久名、伏見康治、中野卓、小島守生、名東孝二、安宅光雄、林武、飯田憲治、川島順平、吉松藤子、見田宗介、田辺多喜、坂野正高、松平文朗、石川達雄、笹森健、武者利光、林泰造、西嶋定生、川田雄一、篠原泰三、土方保、猪瀬尚志、関順也、林俊一、讃岐和家、浅川淳、越智昇、辻達也、鈴木務、三浦徳弘、石井進、望月昭一、山本尚志、柴田政利、綿引二郎、古賀正則、三橋文雄、黒田成俊、見玉昭太郎、外山敏子、高橋勇悦、西山忠範、石川信男、金子晃、藤原鎮男、大内力、坂田道太、松島恵、田島恵児、和田義信、栗本弘、中村進、今井清一、松原治郎、矢部章彦、柳下勇、柏木恵子、高山旭、安藤良雄、土田美芳、梅沢豊、中川一朗、高橋公雄、川原啓美、関野昭一、大原洋司、申照錫、藤平重雄、朝日信夫、黒田道雄、山井湧、中山昌、井上孝、小池滋、福田欽一、宅間宏、千住鎮雄、今堀和友、佐藤和男、荒井良村、鮎川宗康、尾崎茂、岡宏子、米村真藏、吉田美穂子、竹内由亀、磯部力、会田周平、築田長世、岡安茂祐、布施濤雄、望月一憲、米地実、中村浩三、色川大吉、芹沢正三、岡沢憲美、石川馨、川合隆男、出淵博、

- 古本捷治、慶谷仲代、後藤光一郎、松尾浩也、鈴木成文、山口重克、総山孝雄、原誠、厚東偉介、小川信子、小林宏農、十代田知三、角瀬保雄、小山貞、栗原尚子、長野武、奥田夏子、萩原象夫、高島善哉、吉田幸弘、高村康平、羽田新、上原章、市川節子、菊地雄二、佐藤謙三郎、島園安雄、神山四郎、伊藤清子、山本茂、大吉芳彦、徳末安伊子、黒田孝郎、小西悟、太田善磨、福井正紀、天城勲、平出彦仁、稲田拓、永井道雄、小池生夫、伊藤一郎、小川圭治、小沢重男、長谷よし子、浅井邦二、久保三男、大河内繁男、小林正孝、山本武彦、原島幸太郎、太田正孝、新井勝彦、喜多勲、石川淳志、市川博、志賀英、柳下綱道、宮川俊彦、花鳥重春、大原恭子、中村正久、小田切松義、三和治、時枝満康、山岡喜久男、竹下敬次、山本芳夫、鈴木修次、大畑篤四郎、渡辺幸俊、中川重雄、岡本哲治、藤田淑子、原田行男、白浜謙一、佐野晃、岡村文子、福島正久、小幡史朗、三宅彰、加藤栄一、長尾龍一、中島文夫、北村甫、田中弥寿雄、村上陽一郎、城範子、永井克孝、宮野三郎、山田勇、村上光雄、若槻泰雄、菅沼憲治、児玉久雄、榎原祐輔、石井竹松、国分康孝、下田弘、朽津耕三、岡本剛、山本澄子、宮坂松、土山牧民、片山寛、押田勇雄、松村信治郎、松瀬貞規、増田茂樹、徳久球雄、伊藤良三、大蔵隆雄、檜林博太郎、武澤信一、藤永光之、片山清一、浅井義博、

(1ページよりつづく)
 本人ほど遊んだ民衆はいなかったのだ。それが近世の武家社会によって罪悪視されるようになる。と、民衆はお祭という言葉でそれを受け継いでいく。遊びや祭は一見無駄が多いが、互いが結束するための場であり、民衆は一つの節のようにそれを生活の中にちりばめていった。しかも人間本来の姿は案外捨てられないもので、百年、二百年前も現在の、感覚や情緒は根本的に変わるものではない。痛い、悲しい、おかしいなど生活上のことも基礎的な言葉が使われる場所が遊びなのである。人間の本当の姿にもう一度帰ってくる。絶えざる報本反始、繰り返してそこへ戻ってくる結節点、それが遊びの世界である。

このように過去の教育や生活をみるとあらゆるものが混然一体となっていた。今日では生産と消費の場が互いに切り離され、親子も受験勉強に血道をあげるといった有様であるが、この状態を切り換え、躰や稽古のように自己を自己自身で築きあげなければならぬだろう。かつての社会は、貧しいいろいろな制約も多かった。封建的で自主性がなくとも思われていた。しかし、躰にしろ稽古にしろ遊びにしろ自分自身の努力が付け加えられることなしには存在しなかったのである。かつての社会も裏側からみると今よりはるかに面白い、幅のある、ゆとりのある社会であったといえるのではないだろうか。

(第98回大学共同セミナー「日常生活」の全体講義より、文責編集者)



大学英語教育学会小川芳男会長ほか役員諸氏と記念樹の木犀(右)

尾形典男、藤井幸彦、坂本義和、井手久登、小林忠義、古屋野正伍、西村善四郎、渡辺昭夫、長松昭男、松本健次郎、野居茂、森口繁一、小堀桂一郎、高村弘毅、松田徳一郎、山本幹夫、横山宏、松尾登、奥村敏恵、千葉正士、谷俊治、麓信義、原豊、小島達治、三村卓雄、尾形憲、岩崎不二子、大沢綱一郎、井深淑子、鈴木守、岡野澄、飯吉厚夫、高村多賀子、長浜洋一、小林祐子、池上秋彦、小田切美文、長津一郎、飯島泰蔵、後藤米夫、小和田恒、泰本融、田村康男、堀川浩甫、佐藤康胤、森川和久、朝倉孝吉、東寿太郎、栗原照子、岡茂男、安嶋彌、福田一郎、河野恵、村井実、鞍馬菊枝、吉利和、鈴木忠義、宮下啓三、堀江忠男、岡口秀男、伊藤秀夫、関田寛雄、関口利男、関本昌秀、森恭三、内ヶ崎賢五郎、高橋彰

◇会費に添えられた言葉を拾う
いつもいろいろ有益なお知らせを頂き、また御努力の成果をうかがい感謝千万に存じております。
東京大学教授 藤原鎮男
◇東京教育大より千葉大学人文文学部へ転任いたしました。勤め先が八王子とは逆の方向へ更に一時間ほど東北方へ遠ざかりましたため、セミナー・ハウスへ、前よりも遠のいた感じなのは残念ですが、そのうちまた千人会の縁で学生たちを伴って、ごやつかいになりゆきたいものと存じております。セミナー・ハウスのニュースで益々御盛に御活躍の御事拝誦いたし感謝しております。何卒いつまでも御元気でいよいよ立派な国際交流センターの大学内、大学間の交流のセンターを養い育てて下さいますようお願い申し上げます。
千葉大学教授 中野 卓

「ニュース」により小生、宿泊利用時より格段と諸設備が充実されている様子がかがいで、「メンバー」の一員として慶ばし
早稲田大学教授 伏見 弘
◇四月一日付で東京医科歯科大学から名大へ転勤しました。家庭の事情で単身赴任してありますが、誕生カード嬉しく頂きました。折を見て八王子の丘を訪ねたいと念願してあります。千人会のご発展を希っております。
名古屋大学学生課長 嶺哲之助
◇館長先生の御近影と御談話を毎日新聞で拝見、嬉しく存じました。国際セミナー館の竣工を心から御慶び申し上げます、一層の御恩恵と御

発展を祈り上げます。
青山学院大学教授 秀村欣二
◇少々おくれて申しわけありません。仲々参上する折がありませんが、いつも御発展をお祈りしています。上智大学教授 佐藤 弦
◇不況打開もあって多忙を極めております。皆様方の御活躍を祈ります。三菱電機 犬塚 博
◇共同セミナーの御手伝いをして頂きながら、私自身もどこかで学習のチャンスを取載しているようです。お礼の意味もこめて会費を送ります。
聖心女子大学教授 岡 宏子
◇この4月東大定年退官、横浜国立大学に土木学科を設立するために努力しています。
横浜国立大学教授 井上 孝
◇ごぶさたして居ります。セミナー・ハウスのニュース毎号楽しく拝見しています。多摩の丘への郷愁を抱いて再訪の折を計画しています。
目白学園短大教授 中山 昌
◇また誕生日がめぐって来ましたが。会費お送りします。先日、日光の小さなお寺で八王子の千人同心の碑を見つけました。いずれその写真お送りいたします。
計測自動制御学会事務局 猪瀬尚志
◇今日、若者のための諸施設において「管理」意識が前面に出る傾向がありますが、セミナー・ハウ

スは「奉仕」の精神が貫かれていようように思います。ますますのご発展お祈りいたします。
横浜国立大学教授 市川 博
◇今年も幸い健康でこの日を迎えたことを感謝し一燈を献じます。元共立女大教務課長 時枝満康
◇去年は、市内の小中学校卒業生五千人に、卒業祝い贈る、わかりやすい町田の歴史「町田の歴史をさぐる」の編集会議で利用いたしました。市内の小・中学校の先生が中心ですが、皆はじめてということ、大変喜んでおられました。
町田市役所 新井勝紘
◇飯田先生の情熱のすばらしさが少しずつ理解出来るようになってきました。東北郵政局 太田正孝
◇7月上旬、経済地理学研究会の際、国際セミナー館を使わせていただきました。とても快適でした。一度、家族で一泊おじゃまさせていただきます。
埼玉大学助教授 山本 茂
◇千人会の会員も増え、現在では一千人から五百人ほど増加しているように何よりです。いづれ万人会になるかも知れませんね。
立正大学助教授 厚東偉介
◇この8月3日で四五歳になりますが、私の目指すスベイン語文法論の確立には程遠く、そろそろ焦慮を感じはじめています。
東京外国語大学教授 原 誠
◇カナダへ一年四ヵ月交換教授として参っていきまして、8月に帰国しました。
東京女子大学教授 福田一郎

千人会収支決算 自昭和52年4月1日 至昭和53年3月31日

(単位：円)

収入の部		支出の部	
科目	金額	科目	金額
前期繰入金	1,733,810	通振替貯蓄	649,890
会費収入	6,363,500	手数料補助	57,070
雑収入	12,279	学指導補助	1,663,376
		国際プログラム	1,341,821
		ニュース印刷	2,156,860
		計	5,869,017
		次期繰入金	2,240,572
合計	8,109,589	合計	8,109,589

益々充実していくセミナー・ハウスの姿をニュースで拝見しながら、学生と共に利用させて頂く機会がつかれず残念です。
専修大学教授 小田切美文
◇今回よりA会員にいただきたくお願い申し上げます。
東京女子大学教授 高村多賀子
◇4月から東海大学に移り四年振りには久し振りにセミナー・ハウスに伺う予定です。御活躍をお祈り申し上げます。
東海大学教授 鈴木 守

◆国際セミナー館落成祝い寄付報告

昭和53年8月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

- 三井実業㈱ 30,000円
- 社長 小林日文献 21,200円
- 八大学合同セミナー 参加学生一同殿 10,000円
- 八大学合同セミナー 指導教授殿 11,300円
- 国際学生シンポジウム 参加学生一同殿 10,000円
- 上智大学 教授 鶴見和子殿 10,000円
- 千葉商科大学 学長 番場嘉一郎殿 5,000円
- 旧職員 前田 寿殿 10,000円
- 国際協力事業団 八王子研修センター 所長 桜井賢一殿 10,000円
- 多摩設計コンサルタント 社長 鈴木 健殿 10,000円
- 日本YMCA同盟 東山荘 松浦芳文殿 5,000円
- 柴田印刷所 社長 柴田勇造殿 10,000円
- 由木郵便局長 伊東三彦殿 10,000円
- 八王子市長 後藤聡一殿 5,000円
- 法政大学教授 山本 満殿 5,000円
- 普通士学園 理事長 布川角左衛門殿 10,000円
- 大野佐喜子殿 愛国学園短期大学 中岡和子殿 10,000円
- 富士銀行八王子支店 10,000円

◆寄付金報告

昭和53年9月末現在

ご支援を感謝して拝受いたしました。

- 支店長 増田一男殿 5,000円
- 旧職員 藤永鉄雄殿 5,000円
- 座間市立東中学校 教諭 山口清隆殿 10,000円
- 東京大学 教授 公文俊平殿 10,000円
- 東洋アルミニウム 上上琢之殿 10,000円
- 館長夫人 飯田八千代殿 10,000円
- 専修大学学生厚生部 次長 村田正敏殿 10,000円
- 日本大学哲学研究室 栃原ゼミ殿 5,000円
- ハワイ大学学生 チョン・ドンスー殿 3,000円
- 円谷プロダクション 岩坪 優殿 2,000円
- 慶応大学山岸ゼミ殿 2,000円
- 八王子市議会議員 石井栄治殿 2,000円
- 高嶺田地子供会殿 北の台子子供会殿 1,000円
- 民謡会殿 森永牛乳由木配給所殿 1,000円
- 慶応大学アイセック一同殿 10,000円
- 聖ヨゼフ学園高等学校 10,000円

- 10,000円 トーヨー・ダイヤモンド・コーポレーション 東條秀光殿
- 10,000円 三多摩燃料㈱ 社長 渡辺賢典殿
- 10,000円 青山学院大学 教授 秀村欣二殿
- 4,000円 東京大学教養学部 木村ゼミ殿
- 1,000円 八大学合同セミナー 指導者助手 中村 恵殿
- 10,000円 阿佐ヶ谷教会信友会殿 洋服店フクダ 社長 福田秀夫殿
- 10,000円 現物寄付V 大型テープレコーダー二台 ソニー㈱殿
- 5,000円 第2回国立大学厚生補導 事務研修会代表 牧野 実殿
- 10,000円 大学英语教育学会殿 杉野女子大学 短期大学部殿
- 5,000円 第一〇回全国大学院 土壌学セミナー殿
- 10,000円 松下電器産業労働組合 産業東京支部婦人部殿
- 10,000円 視聴覚施設備充実募金V 第99回大学共同セミナー 指導教授 前川誠郎殿
- 遠山一行殿 戸口幸策殿 鹿島 享殿 荒木成子殿 友部 直殿

館長への手紙から

館長は、8月29日から9月1日にかけて行われた「第2回人間関係ワークショップ」(国分康孝東京理科大学教授指導)の参加者を交友館に招いて歓談した。これに対して、全参加者からお礼や感想が寄せられたので、その一部を紹介する。

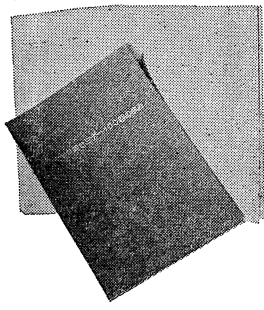
① 菅沼 憲治

千葉商科大学専任講師
五、六年前、私が学生の頃、はじめて大学セミナー・ハウスにきました。確か「進化と適応」というテーマの共同セミナーであったと記憶しています。
今回、教師として学生と共に学ぶことができ、再び人間とは限らない可能性を秘めた存在であることを確認できましたことは、大きな喜びです。
飯田先生よりいただきました「手」とは、そこに人間がある」というお言葉、大変すばらしいと感じました。

② 堤 雅義

東京理科大学理学部第二部の企画を理解されて、お忙しい中、興味あるお話を大変感謝しております。先生の「人間は一個の独立のもので、それからコミュニケーションが形成される」というお考えに非常に興味を覚えました。私は「コミュニケーションが形成されている中」一人一人の独立した人間がある」と感じていたのですが、この考えが人間をとても軽視していると思いはじめました。
さらに先生の教育理念に基づいた、この大学セミナー・ハウスを見て、先生の行動力の強さを感じました。

- 3,750円 勝 国興殿
- 1,000円 キヤノン分析センター
- 5,000円 佐久間純郎殿
- 5,000円 大学英语教育学会殿
- 10,000円 国際基督教大学
- 2,000円 リーダーシップ研究会殿
- 2,000円 東急百貨店 西田貴子殿
- 2,000円 国際商科大学 丸山ゼミ殿
- 5,000円 千葉大学理学部 教授 井上勝也殿
- 4,500円
- 千葉大学アモルフアス会殿 1,500円
- 学習院大学児玉ゼミ殿 10,000円
- 横浜国立大学教育学部 歴史科殿 3,000円
- 学習院大学英文科 小泉ゼミ一同殿 3,500円
- 成蹊大学宇野ゼミ殿 1,000円
- 明治学院大学 神保信一殿
- 三井銀行殿 花瓶 一個
- 清水建設㈱殿 額縁 一面
- レコード 一枚
- 多聞小学校文教研会員 大内寿恵殿



□第一〇〇回を記念して
『大学共同セミナー
一〇〇回の歩み』を発行

10月に迎えた第一〇〇回大学共同セミナーを記念して、『大学共同セミナー一〇〇回の歩み』を発行した。B5判七十二頁の冊子であるが、大学を開く新しい試みとして、当ハウスが開館と同時に実施してきた大学共同セミナーを総括した記録である。

内容は、一回から一〇〇回までの主題、講義と演習のテーマ及び指導教授、セミナーに使用したテキスト・参考文献が各回別に列記してある。前半一二頁は、写真に見る共同セミナーの歴史として、写真八六葉のアルバム集で、巻末には企画委員会・共同セミナー委員会委員名簿、および統計資料が収められている。

各大学で一般教育課程の再編成、総合コースの設置などが行われている昨今なので、この『一〇〇回の歩み』は、好個の参考資料となるものと思われる。
ご希望のときは実費(七〇〇円送料共)を添えて企画室までお申し込み下さる。

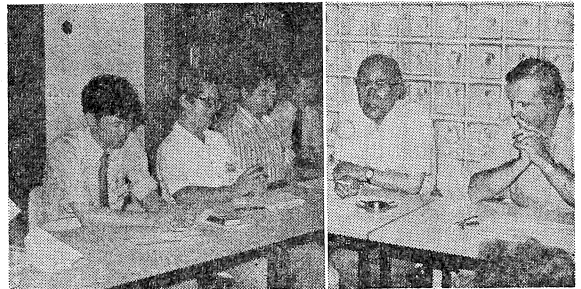
□第一回「英語による日本事情研究セミナー」
語学教育振興会との共催で
昭和53年8月14〜20日

学術の上での国際交流がさかんになっている昨今、すでに一応の業績をあげている若手研究者(大学院以上)のための高度な語学訓練は緊急な課題となっている。
語学教育振興会(COLLTD)は、大学生のための語学の集中訓練(ITC)を当ハウスを利用して定期的に開催しているが、このような状況に対応して今回は当ハウスも運営に参加することとなり、共催のかたちで、とりあえず第一回を実施した。

「英語によって日本の人文・社会に関する諸問題を論じたい、知見を広め、研究に資するとともに、国際交流の実際に習熟させる」とことが今回のセミナーの目的である。したがって、今回は分野を科学・技術系に限って実施することも考えられている。

当初は、参加者(定員約一〇名)の中に、大学院生、研究生として在日中の外国人を半数予定していたが、実際に参加した者は次の五名であった。日本人国立国会図書館、成蹊大学法学部、国立教育研究所、ICU大学院より各一名。アメリカ人上智大学大学院。

主任講師として、京都大学講師・京都ブリティッシュ・カウンスルのD・ヘル氏が指導に当たられ、適宜、総括講師、客員講師として、ソニー教育振興財団専務理事嶋山道夫氏、日本大学大学院



語学セミナーの開講式——右は坪井忠二語学教育振興会理事と主任講師ヘル氏、左は受講生

生J・アンジェー嬢が補佐された。セミナーの日課は次のようである。

〔午前〕「One Hundred Things Japanese」の第一〜二章を材料とした音読練習と内容についての討論。
〔午後〕①参加者による各自の研究内容の説明と、それに対する質疑応答及び討論。②ライシャワ著「The Japanese」に関する意見発表と討論。

〔夜〕共通に興味ある題目を中心とした自由討論。

なお、前述のように参加者が予想を下回った原因は何か、周知方法を継続させるための財政上の方策などが今後の課題として残された。

●寄贈図書

昭和53年4〜6月

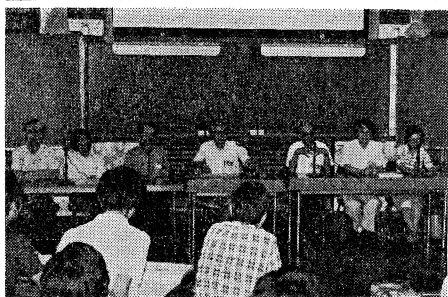
- 「早稲田大学システム科学研究所 紀要」九号 同研究所
- 「空と車イス」No. 3 横山実殿
- 「朝鮮画報」 在日本朝鮮信用組合協会殿
- 「ことばの色彩」 川本茂雄殿
- 「早稲田フォーラム」No. 21 早稲田大学広報課殿
- 「生活の貧しさと心の貧しさ」 みすず書房殿
- 「エナジー対話」一〇号 エッソスタンダード石油広報部殿
- 「総合研究アメリカ」一七巻 斎藤 眞殿
- 「アジアと日本」 国際交流基金殿
- 「比較文化の試み」 大木英夫殿
- 「人類生物学入門」 香原志勢殿
- 「マキャヴェリからレーニンまで」 宮田光雄殿
- 「東海大学短期大学紀要」10〜11号 東海大学短期大学部
- 「適正規模論—自然・生態・人間—」 電気通信工学科殿
- 「現代日本の生活体系」 谷口汎邦殿
- 「虚の城」サラリーマンの文学」 中鉢正美殿
- 「現代の王国と奈落」 芳山邦弘殿
- 「特集フットボール」 スクリリン・イングリッシュ」 荒井良雄殿
- 「ロシアのコスチューム」I〜V、名作歳時記」米の秘史」他一冊 中央公論事業出版殿
- 「大学別就職先しらべ」 日本リクルートセンター調査課殿
- 「企業・土地税法論」 北野弘久殿
- 「中国の近代化と知識人」 平野健一郎殿
- 「宗教と文化」No. 6 聖心女子大キリスト教文化研究所殿
- 「金融経済」一六八 金融経済研究所殿
- 「書いて花咲く哲学」 橋本義夫殿
- 「物価史」第一巻 金融経済研究所殿
- 「シェイクスピア講座講演集」 No. 1〜2 日本女子大学図書館友の会殿
- 「早稲田人文自然科学研究」一五号 早大社会科学部学会殿
- 「外交談判法」 坂野正高殿
- 「佐渡叢書」第一巻 松井源吾殿
- 「まちだの福祉」 町田市福祉事務所殿
- 「採集と飼育」4〜6月号 日本科学協会殿
- 「日本大学紀要」78」 日本大学教育制度研究所殿
- 「経済学とイデオロギー」 「経済学叢史」 「経済学説史」 時永 淑殿
- 「国際法学の再構築」上・下巻 高野雄一殿
- 「金融経済」一六八 金融経済研究所殿
- 「書いて花咲く哲学」 橋本義夫殿

第99回大学共同セミナー

主題—藝術のたのしみ(第三回)

美術・音楽におけるヨーロッパ・ルネッサンス

期日—昭和53年7月14~16日



シンポジウム—左より戸口、勝、遠山、友部、前川、鹿島、荒木の諸氏

△全体講義Ⅰ▽

ルネッサンスにおける南北美術の交流 東京大学教授 前川誠郎氏

△全体講義Ⅱ▽

音楽におけるマニエリスム

音楽評論家 遠山一行氏

△特別演奏▽
オリジナル楽器によるルネッサンス音楽

コンチエントゥス・ムジクス東京

上野学園大学教授 大橋敏成氏

(他6名)

△セクション演習▽

ルネッサンス音楽の特徴

名城大学教授 戸口幸策氏

B 絵に表わされた楽器—イタリ

A・ルネッサンスの作品を中心に—

国立音楽大学教授 鹿島 享氏

C フランドルの春—絵画のルネッサンス・ノヴァ—ブルゴニ

ユ宮廷とフランドル画派の形成

清泉女子大助教 荒木成子氏

D1 ルネッサンス美術における

異教的性格について—イタリ

美術と古典古代—

友部 直氏

共立女子大学教授 (運営委員)

D2 D1に同じ

東京大学教授 前川誠郎氏

同志社大学助教 勝 国典氏

△参加学生▽104名(内女子70名)

共立女大(18)、早大(14)、東大

(9)、ICU(7)、慶大、東女大

(各5)、お茶の水女大(4)、上野

学園大、上智大、同志社大(各3)、

東外大、一橋大、跡見学園女大、

学習院大、清泉女大、多摩女大、

日女大、明学大(各2)、筑波大、

東芸大、電通大、信州大、大阪大、

獨協大、国立音大、国学院大、昭

和女大、女子美大、専修大、中大、

津田塾大、東洋大、武蔵大、明大、

明星大(各1) 合計35校

キャンパスの一角に野外劇場が作られたのを機に実現した芸術セミナーは、三年ぶりで共同セミナー委員の友部直氏が熱心にお骨折り下さったお蔭で、今夏、第三回目として開催されることになった。

た。セミナーの主旨は、芸術を通して「世界と人間の発見」といわれるルネッサンスとは何かを、美術と音楽の二分野から改めて考えようとするものである。

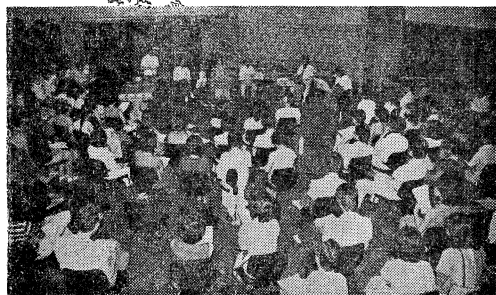
したがって、指導教授陣には美術史、音楽史の分野で活躍されている方々が参画され、スライドやレコードが存分に駆使される芸術セミナーにふさわしい極めてユニークなセミナーとなった。学生の反響も大きく、応募者は百余名を数えたため、急ぎセクションをふやすなどして、学生の要望に配慮することになった。

○

第一日目は、デューラー研究の第一人者である前川誠郎氏の全体講義で開始された。氏は、ルネッサンス美術の南北交流の一例として、ベネチアの大画家ジョルジオーネの唯一の真作といわれる「ラ・テンペスタ」を取り上げ、百年来、美術史研究者によって試みられている絵解きの幾つかを紹介されてから、この絵の人物、構図がデューラーの三つの銅版画をふまえているという説をたてられ、デューラー側からの傍証を詳細に示された。そして銅版画本来の意味はこの絵に全く用いられていないとして、絵画におけるマニエリスムに言及された。

○

二日目は遠山一行氏による全体講義Ⅱが行われた。氏は、マニエリスムは単に歴史上の問題ではなく、現代にかかわるものであるという意識で話をすすめていきたいと前置きし、音楽の上でマニエリスムを歴史的様式概念として用いるにはかなり無理があることを前



古典音楽の夕べ

おける歴史主義と古典が学ぶものとなり、教育が音楽の本質となつてしまった状況を課題として提示された。

そして、二日目の夕食後には、今回のセミナーの特別企画である「古典音楽の夕べ」が催され、大橋敏成氏の主宰するコンチエントゥス・ムジクス東京によって、中世とルネッサンスの器楽曲及び歌曲一八曲が演奏された。招待客、当日在泊のゼミ生を加えた聴衆は、戸口幸策氏の解説付きで、バロック音楽とはかけ離れた世界を展開する古い音楽の優雅な音色を鑑賞した。また当夜は、ルネッサンスの木管楽器の収集家・高橋実氏と、レガール・オルガン制作者・横田宗隆氏によるそれぞれの楽器のデモンストレーションもあり、参加者全員、「芸術のたのしみ」を堪能した一夜であった。

○

最終日は昼食後、全教授が参加して、マニエリスムとは何かを中心的テーマとしたシンポジウムが行われ、ルネッサンスやバロックの名称についても種々討議がなされた。最後に、運営委員の友部氏は、「わからないことがあったら、作品に帰るしか私達に出来ることはないように思う。そして自分が考えるほかはない。その参考のために書物があり、先輩がいるのではないか。その逆を行つたならば活字の迷路、さまざまな異なる理論の迷路に入り込み、これはルネッサンスかバロックかといった境目の曖昧さが濁れていってしまうだろう」と学生に語りかけられ、芸術セミナーの幕は閉じられた。

予想外に早く梅雨が明けて、真夏の暑さの中に三日間のセミナーは終了した。「芸術がわれわれにとって幸いなのは、作品を個人の感覚やそれまで習得した知識で取り組むことができることである。ミュージズの前にわれわれは全く平等である、ということはこのセミナーで実現してほしい」と友部氏は開会に当たって述べられたが、その願いは、思う存分作品に向き合い、共に語り合った学生たちと、その学生たちに誠心誠意対応して下さった先生方によって、概ね実現したことだろう。ただ惜しむらくは、講義や演習にフルに使用されたステレオが、音質、性能の面で満足の鑑賞にたえるものではなく、当ハウスの視聴覚設備に大きな課題を残した。

なお、オプザバーとして参加した国立音楽大学講師で、古典楽器の一つであるヴィオラ・ダ・ガボン奏者の神戸愉樹美さんは、月刊誌「ギター」9月号に、このセミナーの詳細なルポを行っており、次のようにそれを締めくくっている。

「不確実性の時代と呼ばれ、価値観の差による混乱が生じている今日、過去の文化遺産の美しさや偉大さを深く知ることは興味深い。二〇世紀現代のマネリスティックな時期を過ぎて、若い世代がどんな方向に発達していくのであろうか。第99回目のこの共同セミナーでは、そのような若い世代の未来について触れられた。これらの総合的な視野をもった教授陣の暖かい目差しに守られて過した三日間は、幸せなひとときであった。

今、セミナーを終わって感じることは、若者たちが、たとえひとときなりとも学問と芸術のたのしみを垣間見、新しい世界や友人に出会えたであろうことである。これは、長い間の準備とゆき届いた企

〇〇〇多摩の丘の自然に学ぶ〇〇〇

野鳥の巣箱を作る

学生グループの活動報告

昨年7月に発足した巣箱作りグループは、この一年間に一〇回の作業を行い、提唱者の東工大三年松田圭弘君を中心に、毎回、日曜日の午前11時から午後6時頃まで熱心に取り組んできた。参加した男女学生は延べ四〇名である。

作業内容は、①巣箱約五〇個製作、②巣箱一二個の設置、③多摩



作品・野鳥のパネル (出合いの丘)

画もさることながら、飯田宗一郎 大学セミナー・ハウス館長が心細やかな豊かな生活環境を提供して下さったからでもある。参加者は感激を胸に八王子から帰途についた。」

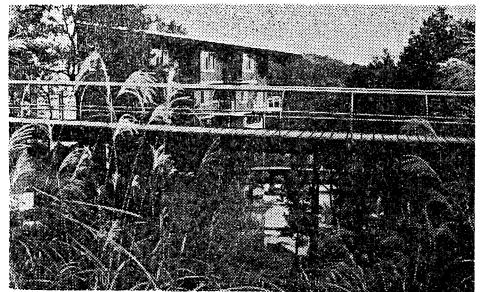
に生息する野鳥のパネル二枚の制作と設置、④取り付けた巣箱の整備・掃除である。

③のパネルには、職員の協力写真のように立派な屋根が取り付けられ、9月初旬に出合いの丘に設置された。宿舎から食堂への通路なので、必ず視線が集まるが、なかなか好評のようである。また10月22日、④の作業を行ったところ、一二個のうち八個に鳥が巣を作ったことがわかった。しかし、営巣をしなかった巣箱でもゴキブリなどが住みつくので、掃除は必ずしなければなら

誰でも簡単に「巣箱を作ったかいたら」というけれど、実は木にかけてからも絶えず細かい配慮が払われなければならないことがわかった。

一〇回に皆動した松田君は次のように呼びかけている。

△みなさまへお願い▽
 (1)巣箱作りのグループはいつも人手不足です。自然の好きな方、体力、木登りのある方、手先の器用な方、自信のある方、絵の描ける方、ちょっと冷やかしてやろうと思っている方、どなたでも結構です。新しい仲間を待っています。



風もさわやか (国際セミナー館、池、かやばし)

(2)巣箱作りのグループには、まだ正式な名称がありません。だから素敵な名称をプレゼントして下さい。

自然観察講習会を開催して

京浜女子大学生物学研究室

牧 林 功

7月24日より27日まで「多摩地区の動植物観察」を主体とする講習会を開催した。この講習会は本研究室と湘南生物研究会が、毎年の夏季に希望者を募って行う恒例行事である。本年は東京薬科大学坪井実教授の紹介で当施設を使用させて頂いた。なお講習会には本学の初等教育教員を志す学生のうち一四〇名が参加した。

大学セミナー・ハウスの周辺は、二次林よりなるが、かなり豊かな自然に恵まれているため、このような場所にすむ各種小動物が、比較的手軽に観察できて便利であっ

た。しかし、都市近郊の観察されつくされたような自然であるため、分布地として新記録となるような、めざましい記録は少ない。ただ、タイワンツクツクムシ *Mecopoda elongata* L. が記録されたことは特筆に価しよう。この種は東洋熱帯系のもので、いままでは知られている分布の北限地は伊豆半島であるから、新しい北限の記録となる。

また国蝶であるオオムラサキ *Sasakia charonda* Hewitson も記録されたが、東京都およびその周辺で年々少なくなっていく同種が、まだこの地に見られることはご同慶のいたりというべきであろう。

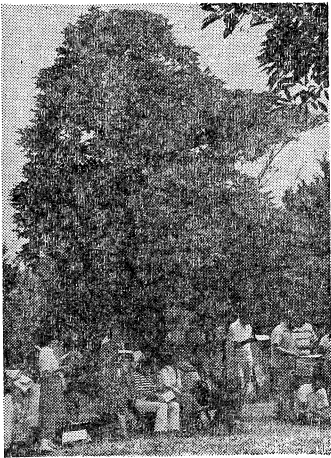
これらを含む材料をもとに、学生には昆虫の形態、生態をしっかり観察させた。都市の団地に住むような学生にとっては、この豊かな自然はそのまま驚きであるが、さらに細かく観察していけばいくほど、巧妙にできている、これら小動物達の生活への適応の姿に魅入られて、夢中でルーペをのぞき、さかんにスケッチをしていた。自然の一端を知り、そのなかにはいりこめばはいりこむほど、観察に興味を感じ、真摯な姿勢でとりこむものである。改めて知らされた思いである。

やはり自然の勉強は、書物だけに頼るべきでなく、自然そのものから学んでいくことが大切であるが、大学セミナー・ハウスはそれに好適な環境と設備をそなえており、予期していた以上に学生達が学びとったものとして理解している。

● 事業部だより

● 8・9月の利用状況

記録的な猛暑の8月は、例年のように、夏休みを利用した国際会議や語学研修などの長期滞在グループで賑わった。これらの集会には、諸外国の人々も講師あるいは参加者として加わっており、今年も盛夏特有のキャンパス風景が見られた。8月後半から9月にかけては、夏休みの最後を合宿にあてた各大学のゼミ利用が相次いだ。そして、9月下旬には、全館使用による大型国際会議「国際体育・スポーツ史東京セミナー」が五日間にわたって開催された。この両月の利用状況を数字で示すと、8月はグループ数が一〇四、宿泊延人数は四、三八七人。この延人数の約半数は前記夏休みの諸集会の参加者である。9月のグループ数は一三九、宿泊延人数は五、〇六六人となるが、グループ数の一三九は、従来の月間最多記録である昨年7月の一一一人を大きく上回る新記録である。



英語の歌唱練習 (ELECセミナー)

元住民を加え、計三〇〇人を超える交流の集いとなった。今回はタイ国の九名がやぐらの上でお国の踊りを披露し、それに応えて一同が踊るなど、充実した

● 国際交歓の夕べ

日本国際学生協会 (ISAJ) 主催の第25回国際学生会議が8月3日から6日まで開催された。同会議の当ハウス利用は今年で三度目、日米学生会議 (この夏は米国で開催) とともに、すっかりこの季節の常連となった。今回の外国人参加者は、韓国、香港、マレーシア、インドネシア (各一人)、タイ (二人)、フィリピン、フィジー、パプアニューギニア、トンガ (各一人)、以上九ヶ国からの三十八名、日本人学生は全国一九大学から四五名。全体が五つのテーブルに分かれてアジアにおける異文化間の交流、民族・人種問題、軍備拡張、人口・食糧問題、社会における学生の役割などを焦点に議論を進めたが、当ハウス滞在中昼間に夜内へのフィールド・ワークに、夜は討論や自由交歓にあてた。これら内外の学生の歓迎にあわせて在泊者相互の交流をはかるため、当ハウスは8月4日の夕食後、夏の恒例行事「盆踊り大会」を開催した。当夜在泊のハグループの他、今年も八王子国際研修センターの東南アジア、中近東、アフリカなど一〇ヶ国からの研修生一七名、さらに近隣の子供会など地元住民を加え、計三〇〇人を超える交流の集いとなった。今回はタイ国の九名がやぐらの上でお国の踊りを披露し、それに応えて一同が踊るなど、充実した

交歓プログラムが組み入れられたのが好評であった。終了後も国際交歓の流れは交友館を満ちし、マレーシアやインドネシアの歌などが続いた。

● 語学研修グループの利用

静かな自然の環境の中で「教師と学生が起居を共にし、人格的接触を図りながら勉学すること」を目的とする当ハウスは、語学の集中研修にとしては、そのまま最も望ましい場と状況を提供することになるよう、一期待以上の成果を上げたという声を聞く。そのことは、語学研修の諸グループが長年連続して当ハウスを利用し、また新しくこの種のグループの利用が増えていることと無関係ではないであろう。8月中旬の一週間、全国の主として中学・高校の英語科教師一・二名が八名の外国人講師から生きた英語を学んだ英語教育協議会 (ELEC) のセミナーも同月下旬の九日間、福井芳男東大教授、フランス人講師数名と一四大学からの学生二八名が、終始フランス語のみを使用して生活と研修を続けた語学教育振興会 (COLTD) の仏語集中訓練合宿も、7月に実施された大学英語教育学会 (JACET) 同様、ともに当ハウスの利用はこの夏十数回目を迎える。高校の英語教師が在日外国人ボランティアと生活を共にする東京都高等学校英語研究会も、すでに当ハウスの常連である。この他、9月中旬には津田塾大のフレッシユマンから四年までの三〇名が七泊のITC (英語強化合宿訓練) を実施している。古木宜志子助教、米国人講師二名と国際セミナー館の同じ屋根の下

● ELEC 講師 Michael E. Workman 氏から館長に宛てられた8月22日付書簡より

We had beautiful summer weather—Nihon-bare blue skies, deliciously cool evenings with Kirin beer, English songs, and the joyous repartee in the International Fellowship Lounge. There was lots of tennis, a volley ball tournament, continual frisby, and even Japanese go. Jane and I had the chance for early morning and late afternoon walks through the lush August foliage. Even the oily cicada seemed intent on practicing outside our window. In particular, I'll never forget the Japanese style bath. One night I turned off the electric light in the bathroom, soaked in the hot tub, watching the silver moon climb across the high sky.

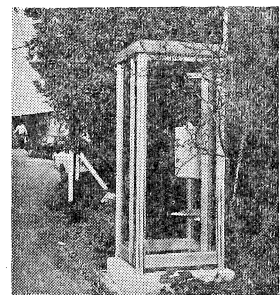
In these two years in which I have come to the Inter-University Seminar House as teaching supervisor of the ELEC Spring and Summer Seminars for English Teachers, I have observed the unfoldment of your ideas. You make material progress while the spiritual charms of the old place remain undiminished. In your steady vision, Director Iida, problems become programs, dilemmas turn into dreams-come-true.

Having been so welcomed, Jane and I will feel homesick for you and your well-trained staff in the months ahead. We are deeply struck by their high-minded devotion.

We do look forward to another visit. It would be so nice to go to Hachioji on a weekend 'just to relax under your sheltering wing.' Please remember us to Mrs. Iida for her scrumptious cake served at high tea on Saturday and to your lovely, competent daughter, Ms. Iida.

Our BEST wishes to you and the staff.
May God bless your magnanimous dreams!

で過した英語による一週間の生活は、教室での授業では望めぬ学習効果を収めたことであろう。相互に交わす会話は日増しに生き生きとしてくるかに見受けられたし、最後の晩の夕食時に行われた他大学習一三グループとの学生交歓会では美しい英語の合唱を披露してくれた。



新設の電話ボックス (8月8日), 後方は本館

館での朝食会に招待し、米国、英国、ニュージーランドからの二二名がこれに出席した。

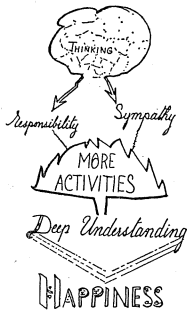
ある日の

国際交流点描

交友館を活用して

ユネスコ・アジア文化センター主催の第11回「アジア地域出版技術研修コース」が、9月10日から三日間開催された。例年約一ヵ月間のコースの導入部分にこの丘での共同生活体験が組み入れられるが、今年には国際セミナー館が全面的に活用され、好評であった。今回の参加者はアジア地域一四ヶ国からの一六名。初日国際セミナー館の宿舎に到着した後、館長が交友館での歓迎お茶の会に全員を招待した。館長がたまたませミで来ておられた坂本義和東大教授にスピーチをお願いしたので、アジア地域の研修生たちは到着早々の歓迎パーティで、この優れた国際政治学者から、アジアの役割について感銘深いオリエンテーションを受けるという好機会に恵まれた。また、成蹊大の宇野重昭教授、相模女子大の五十嵐良雄教授からも歓迎のメッセージがのべられ、それぞれのゼミの学生も参加して充実した交歓のひとつとなった。期せずしてこのようなたちで相互の交流ができたことは、アジア諸国の人々にも、また日本人学生にとっても貴重な体験となったようだ。

なお、同センター図書開発課長浅野明美氏のご好意で研修生から後日、館長宛に感謝のメッセージが多く寄せられた。当ハウスの印象が簡潔にまとめられていて興味深い。拔すいして、そのいくつかをご紹介します。



My impression of the Inter-University Seminar House is the orientation.

Orientation having Sense of Belonging.

Pranom Pungah
Sept. 15th 1978

* * *

On 10th Sept. we went to the sylvan surroundings of the Inter-University Seminar House in Hachioji, located in the suburbs of Tokyo and stayed there for three days. The time was really very short. It would have been much better if the whole course would have been conducted in IUSH in Hachioji. Still then, I can say that I am really moved by the surroundings of the Seminar House and of course the motto of the House i. e.; Plain Living and High Thinking. I have kept the vivid picture of Hachioji and I will never forget the feelings which I gathered from Hachioji. This is my feeling that in order to obtain deeper understanding and fellowship between us through living, studying and thinking together in small group, in natural surroundings, Hachioji is an ideal place for that.

Syed Ali Kazem (Bangladesh)

* * *

The location of this place is very ideal for the students because the peace and quiet it offers. The group study and the chance to meet other fellow students from the various universities in Japan indeed help to bridge the gap between universities and help them to see their national responsibilities as a whole. The self-service concept in the Inter-University Seminar House helps the students to feel that this place does not offer special privileges, and that it aims towards a cooperative and responsible society. The same sense of belonging was felt among us and it was at Hachioji that we (the trainee) became more acquainted and know each other very well and bringing in the Asian unity and sincerity concept.

Izzah Abdul Aziz (Malaysia) (Miss)

* * *

Inter-University Seminar House is a real unique body, so far as I am concerned. I have never come across such an organization which provide facilities (self service style) only for students at a very reasonable rate at any time of the year. Actually I was expecting a normal university atmosphere, with monotonous blocks of building facing each other. But, it really surprised me to see before my own eye that IUSH consists of a "village" with different type of rooms

and cottage-like lodge and seminar rooms. The view was fantastic from any point, for it's situated on a hilly area.

Atiah Hj. Mohd. Salleh (Malaysia) (Mrs.)

* * *

Hachioji is to me a symbol of Japanese courtesy. It offers "gifts" most precious and now rare to modern man: NATURE, SILENCE, CULTURED COMRADESHIP.

Preciosa S. Soliven (Philippines) (Mrs.)

* * *

The trip to Hachioji was very interesting. The Inter-University Seminar House was a convenient place for the students in the higher level. They will have the opportunity to talk to other students coming from different universities in Japan.

Jose B. Benipayo (Philippines)

* * *

When we reached Hachioji City we were warmly welcomed in the Seminar House of the Inter-University premises. A reception party in the new cafeteria was held. We were introduced there amongst the professors and students. Mr. Iida is really a great man. I felt respect for him. With his hard endeavour only it was possible to build this institution. He has devoted his life for others. The Inter-University Seminar House is built in unique style peculiar to us. This site is far from the city and near to the nature. Hilly and jungle area certainly gives one peace of mind. In peace only we can prosper and attain great knowledge. In Hachioji we became acquainted with others as brothers and sisters. In this place I knew the value of cleanliness. The management of the Seminar House is very praiseworthy. I had not enough knowledge before. But I learnt here what is cleanliness. In cleanliness only God lives. Purity of mind is an essential factor in life. This is what I got from the 3 day stay at the Inter-University Seminar House.

S. P. Koirala (Nepal)

* * *

The seminar held in the Inter-University Seminar House was very impressive. I found the House to be a very warm and friendly place. It gave us a chance to mix with the Japanese University students and professors so that we could know their thinking and the way of living.

Wong Tong Hoi (Singapore)

* * *

Any observation of mine about the Seminar House will be incomplete without a reference to its founding father Mr. Iida. The Seminar House became a reality largely due to the efforts of this visionary. And the poet Fujitomi in a poem dedicated to Mr. Iida says this: "You still have a long way to go." And there is no doubt that the House will blossom into an International Seminar House.

V. Perampalam (Sri Lanka)

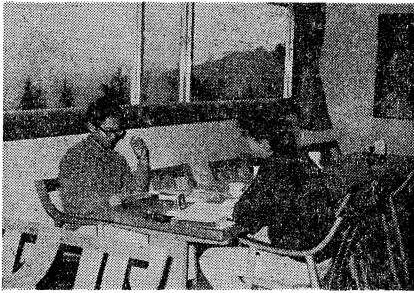
交友館から

開館から四カ月を経て
定着した利用方法

利用者側の要望を考慮しながら交友館本来の姿勢を整えてゆこうというところで、サービスマスターをスタートさせた。結果的には7月、9月の間、一日も休まず午前10時より午後11時までフル回転であった。勉強の合間の休憩に、あるいはゼミ終了後の夜の懇親会やコンパ、学会のパーティなどにぎわった。

教育研修施設であるから、アルコール類は食堂だけ、という原則を立てていたが、実際はそれが守られずに、問題となっていた。そして交友館が出来ることにより、当ハウスのサロラしい雰囲気を作りながら飲めるようになって、対話の場が一段と活況を呈してきたといつてよい。

午前10時から午後6時までが、コーヒー、紅茶、アイスクリーム等、午後6時から11時まで、ピ



コーヒーと語らいと(交友館)

The Tea House in my opinion, more than any other places, has to a great extent contributed towards making our stay enjoyable and worthwhile. For here was the place where new friends are made and old acquaintances renewed and strengthened. It is the ideal setting for friendly conversation as well as serious discussion.

May the IUSH be with us forever!

Mohd. Fadzlan Samad
Univ. of Malaya
(第25回国際学生会議参加者)

ール、ウイスキー等をそれに加え提供している。番茶と冷たい水は無料で常時サービスマスターで提供。これまでサービスマスターで提供していた湯茶(一日三回)も交友館に移したので、暑い日には、お茶の代わりに冷たい水をヤカンに入れてもらって、喜び勇んでゼミナール室に持ち帰る光景も見られた。交友館の利用方法は多彩である。場合によっては、ゼミなど利用者に対するフロントからのオリエンテーションの場に使われる。これまで食堂でもたれてきた館長招待の朝食会も交友館に移った。晴れた日には、丹沢の山々を見上げながら、さわやかな朝食をたのしんでいただいていた。また、十年来、職員研修会場として利用してこられた順天堂大学付属病院の場合は、百名の立食の夕食会を催された。

し、自信を持つにいたったようである。9月26日から30日には、全館貸切りの初めての大きな国際会議である国際スポーツ史学会を引き受けたのであるが、「もしも交友館がなかったら、どうなっていたのだろうか」とその効果のほどを学会役員の方々は絶賛しておられた。国際ゼミナール館と交友館が期せずして同時に建てられたことにより、当ハウスは、ようやく学会、教育団体、国際会議等を安心して開催できる施設になったわけである。

新会員校・相模女子大学の
グループを歓迎

相模女子大学の五十嵐良雄教授と学生六名が「学校教育研究会」で9月9日から三泊四日の合宿を行った。これは、この夏当ハウスの第54番目の会員校となった同大学の加入後の初利用であり、当ハウスは9日の夕食時、食堂に在泊の九グループ一八名を集めて、この新加入校に温い歓迎の意を示した。館長のあいさつと一同の拍手に応え、五十嵐教授と学生代表が感謝の言葉を述べたあと、同研究会一同が美しい女性合唱を披露してくれた。最後に他大学の有志の合同指導で全員が合唱して交歓のひとつときを終えたが、同研究会のメンバーは、これを契機に滞在中他の大学と交流の機会を持つことができたようだ。

後日、彼女たちから次のようなお礼が事業部に送られた。



いも畑の初収穫(10月3日、東京学芸大リダーシップ・トレーニングの学生たち)

五四番の会員校となった私たち相模女子大学のために盛大な歓迎会を催していただき、忘れぬ思い出の一ページを作っていた。このことを本当に嬉しく思っております。

しかし、ユニット・ハウスを基点としての他の設備への移動は、人間のふれあいを深めるために大変良いことだと思っておりますが、少しせいたくを言わせていただければ、雨天や冬などの場合、少し不便を感じました。



ある風景(アヒルにもセミナー室あり)

これから大学にもどり、私たがはゼミナールハウスの存在とその利用の価値と意義を多くの学生に伝え、機会あるごとにゼミナールハウスを活用することを約束したいと思えます。

心をなごませる
池とアヒル

国際ゼミナール館の建築工事から思いがけない副産物として、二つの人造池が誕生した。上の池は雨水と湧水の溜池、下の池は全館の下水排水のすべてを集めて造った溜池である。上の池にはアヒルが五羽住んでいる。防蚊対策として天敵のヒゴイを一〇〇尾放したところ、泥の中の微生物をつつくせいか、水は土色に濁っていたが、最近、アヒルの出す汚物によってようやく水の中に植物性プランクトンが発生し始め、緑色に変わってきた。丘を散歩しながら、水面に浮かぶアヒルの姿に眼をとめる人も多く、この付近はキャンパスの新風景である。

●館長日記から

10月は、共同セミナー第一〇〇回記念の日であった。この十三年、一筋に歩みつづけて一〇〇回の記録をつくった。ロバート・オーエンは米国に新天地を求め、新しい村を建設しようとして入植したが、一年足らずで彼のユートピアは失敗したという。セミナー・ハウスが共同セミナーを中核として順調に生きのび、ユートピア運動に終ることがなかったのは、いかなる要因によるのであろうか。最大の要因は、すぐれた大学人のボランティアによる協力と奉仕に、活動の基盤を築くことに成功したからであると思う。それが私の率直な感想である。当ハウスの経常費と職員の数に比して、事業の成果がいかに大であるかに気づくならば、何人もその事実を理解して下さるに違いない。◆セミナー・ハウスは博覧会でないから半年や一年で閉鎖されることはない。事業を続けることは経営を伴うので真実、苦勞の連続である。10月8日の記念パーティの乾杯を下さった日本学術会議会長伏見康治博士は挨拶の中で今日ある大学セミナー・ハウスの秘訣について次のように説明された。「民主主義の風潮が蔓延している現代の日本において、セミナー・ハウスが今日のように持続し発展し得たのは強烈な個性を發揮し、個人の創意を実行に移した指導者があったからである」といって、民主主義にはリーダーシップが必要であることを強調されたのである。大要そのようにいって私

をはめて下さったのであるが、参会された二五〇人の方々も千鈞の重みをもって、このご挨拶をうけておめで下さったことであらう。日常あまりにも多く民主主義の弊害を見ているからである。◆十三年前、開館記念パーティの乾杯は元東大総長、日本学士院長南原繁先生でした。第一回共同セミナーはその乾杯に祝福されて踏み出したわけである。継続すること一〇〇回。まさにこれ大学教授のボランティアによる勝利の記録である。協力と善意と関心と支援と友情と理解の総括である。◆一〇〇回のうち、ただ一回、八二回の革新的伝統の共同セミナーに欠動しただけというの、健康を大事にしてくださいの生き方によるといっては誇張であらうか。◆「あなたは沢山の人が援助をうけてセミナー・ハウスをつくったのだから、責任上毎日出勤して施設を管理し、職員を監督指導しなければならぬよ」とは、南原先生の愛の忠告であった。◆私は祈るような気持ちで10月7日の朝を迎え、感謝いつぱいの満足な気持ちで10日の夜に至った。次号は第一〇〇回を特集し、数々の感謝を申し上げたいが、ここでは取りあえず喜びと苦勞を共にしていただいた岡宏子、野田春彦両教授と企画室主事飯田能子に心底からのお礼を申し上げるにとどめた。「年の長幼を計らず、惟だ才徳を以って忘年の交わり」をつづけたかというのが私の願ひである。「王様ははだかだ」と喝破した子どものように、「館長ははだかだ」とすなおに認めてほしいというのは私の勝手な願ひであらうか。

●利用状況

* 11月2日利用
* 11月3日利用

慶応義塾大学教授	小野山卓爾	法政大学教授	伊達 秋雄
神奈川大学助教授	三浦 孝司	青山学院大学助教授	松坂 章二
東京都立大学助教授	石村 善助	東京学芸大学教授	永野 賢
電気通信大学助教授	角田 稔	明治学院大学 N.E.S.S	吉沢読書会
東京都立大学助教授	田辺 良美	立教大学教授	御茶の水キリストの教会
武蔵工業大学助教授	益子 正巳	国際基督教大学教授	同人新理想社
東京学芸大学講師	池田 義人	東京大学教授	稲毛屋
東京大学助教授	増田 久弥	東京大学助教授	目黒都税事務所
東海大学講師	浅井 紀	東京大学助教授	ソフトウェアマネジメント
武蔵工業大学構造デザイン研究会	吉村 二郎	東京大学助教授	大成建設
中央大学助教授	佐治 守夫	東京大学助教授	小西六写真工業
東京大学助教授	筒井 若水	東京大学助教授	日本能率協会
明治大学助教授	徳永 豊	東京大学助教授	フジシマ
国際基督教大学教授	都留 春夫	東京大学助教授	【個人利用】
東京家政大学助教授	橋口 英俊	東京大学助教授	東京都立大学学生
慶応義塾大国際経済商学学生協会	湯川 和夫	東京大学助教授	明治学院大学教授
法政大学教授	小林 弘	東京大学助教授	武蔵中学校教諭
東京学芸大学教授	伊丹 邦夫	東京大学助教授	白梅学園短期大学教授
東京理科大学教授	高野 史郎	東京大学助教授	上智大学講師
明治学院大学教授	加藤 寛	東京大学助教授	沖繩ユザ看護学校
慶応義塾大学教授	野村 東助	東京大学助教授	東京学芸大学教授
東京学芸大学助教授	野村 東助	東京大学助教授	明治学院大学教授
東京大学生物学史研究会	野村 東助	東京大学助教授	東急百貨店
東京大学助教授	斎藤 静樹	東京大学助教授	明星大学生
東京大学地域医療研究会	斎藤 静樹	東京大学助教授	京都大学助教授
東京大学原子力学研究会	萩原 進	東京大学助教授	【日帰り】
法政大学助教授	萩原 進	東京大学助教授	市川きよの学院*
東京経済大学事務研究会	増山元三郎	東京大学助教授	9月
学習院大シニイクスピア劇研究会	藤井 一美	東京大学助教授	東京大学助教授
東京理科大学教授	斎藤 和明	東京大学助教授	東京大学助教授
成蹊大学教授	斎藤 和明	東京大学助教授	津田塾大学講師
国際基督教大助教授	斎藤 和明	東京大学助教授	一橋大学マキユリ

日本ペール協会	田中 浩
日本友和会	山口 治
吉沢読書会	神保 信一
御茶の水キリストの教会	南出 新治
同人新理想社	田中 未来
稲毛屋	津波 民雄
目黒都税事務所	斎藤 耕二
ソフトウェアマネジメント	高野 史郎
大成建設	西田 貴子
小西六写真工業	高橋 功
日本能率協会	豊田 昌倫
フジシマ	石 弘光
【個人利用】	
東京都立大学学生	
明治学院大学教授	
武蔵中学校教諭	
白梅学園短期大学教授	
上智大学講師	
沖繩ユザ看護学校	
東京学芸大学教授	
明治学院大学教授	
東急百貨店	
明星大学生	
京都大学助教授	
【日帰り】	
市川きよの学院*	
9月	
東京大学助教授	行方 昭夫
東京大学助教授	城塚 登
津田塾大学講師	星野 昭吉
一橋大学マキユリ	
法政大学教授	西川大二郎
東京理科大学教授	国分 康孝
日本大学教授	瀬川 渡
東京経済大学都課長研修会	
津田塾大学 E.S.S	
明治大学助教授	加藤 隆
法政大学助教授	豊田 武
学習院大学助教授	荒井 良雄

- 東京家政大学助教*橋口 英俊
東京工業大学助教 黒沢 一清
日本女子大学教授 小川 信子
横浜国立大学教育学部歴史学教室
杉野女子大学講師 坂口 耕史
学習院大学教授 小泉 一郎
明治学院大学教授 内海 浩
東海大学助教 内海 達見
共立女子大学英語劇研究会
武蔵大学講師 武内 清
武蔵大学教授 渡辺 勉
津田塾大学教授 長沼 秀世
上智大学講師 橋本 茂
中央大学教授 江口 英一
横浜国立大学助教 吉川 武男
日本大学教授 名東 孝二
法政大学計算技術研究会
法政大学教授 野田 正穂
東京大学教授 坂本 義和
成蹊大学教授* 宇野 重昭
日本大学交通計画第一研究室
中央大学講師 小西 正捷
青山学院大学教授 伊藤 文雄
相模女子大学教授 五十嵐良雄
青山学院大学教授 深沢 実
上智大学英語研究会 金谷 展雄
津田塾大学シニエークスピア研究会 津田塾大学助教 三橋 文明
慶応義塾大学英語会 中央大学教授 中村 勝己
慶応義塾大学教授 青山学院大学クラブ連合 早稲田大学講師 深沢 実
早稲田大学講師 東京大学教授 相良 亨
早稲田大学助教 早稲田大学講師 大春慎之助
津田塾大学講師 中里 明彦
東洋大学太極拳研究会 明治大学教授 横田 澄司
東京経済大学助教 林 昇一
中央大学教授 飯野 利夫
神奈川大学教授 小山吉之助
東京経済大学助教 佐藤 博
青山学院大学教授 菊地 元一
津田塾大学ITC 津田塾大学助教 元一
共立女子大学日本民話研究会
東京経済大学教授 大原 慧
中央大学教授 藻利 重隆
早稲田大学教授 北野 弘久
明治学院大学第二部点訳会
中央大学助教 緒方 俊雄
神奈川大学助教 大友 賢二
東京経済大学教授 西川 義朗
早稲田大学教授 浅井 邦二
早稲田大学助教 嶋 武彦
立教大学教授 茂木 虎雄
東京農業大学栄養化学研究室
- 明治学院大学助教*松島 淨
早稲田大学教授 清水 望
立教大学教授 井上 治典
法政大学教授 兼子 春三
立教大学教授 三宅 義夫
立教大学文学部集中合同講義
成城大学助教 武蔵 武彦
明治学院大学教授 原 正彦
慶応義塾大学教授 榎 昭彦
明治学院大学教授 竹内 真一
横浜国立大学教育学科
津田塾大学助教 明石 紀雄
神奈川大学助教 三浦 孝司
早稲田大学教授 戸沼 幸市
慶応大学アイルランド研究会
明治大学教授 徳永 豊
早稲田大学教授 川原 栄峰
津田塾大学助教 馬場 伸也
国際基督教大学児童文化研究会
増田 茂樹
東京都立大学教授 関口 晃
相模女子大学同窓会茶道部
武蔵大学講師 犬塚 孝明
明治学院大学教授 宮野 彬
東京学芸大学一般運動研究会
上智大学手話サークル
関東聴覚障害学生懇談会
- 立正大学教授 中村 禎里
都留文科大学教授 和田 明子
山梨県立女子短期大学講師 原田たり子
山梨英和短期大学英文学セミナー
横浜国立大学助教 内藤 純郎
横浜国立大学教授 越智 昇
産業能率短期大講師 佐野雄一郎
フェリス学院大学講師 内田 道雄
CETIの会
RAPRAS研究会
国際体育・スポーツ史セミナー
第11回アジア地域出版技術研修コース
カンバード長老キリスト教会
日本基督長老教会
全国予備校協会
多摩ユニザック
国際工業所有権研究会
武蔵野電気通信研究所
富士電機労働組合
三井東洋化学
立川生協
アイソツイヒ・インスティテューション
ソフトウェアアマネジメント
東京システム技研*
- 京王プラザホテル
全大九労働組合町田支部
経済学研究会
【個人利用】
竜谷大学教授 吉田 茂芳
法政大学助教 屋嘉 宗彦
玉川大学学生 山中 雅生
武蔵中学校教諭 南出 新治
埼玉大学助教 山本 茂
大東文化大学助教 今井 けい
【日帰り】
日本自転車振興会
市川きもの学院

全面改稿・最新資料増補

H・B・トレッカー著 ソシアル グループ・ワーク

原理と実際

永井三郎訳
A5判・四五〇〇円

ソシアルG・Wは、今日、各方面に用いられその効果を認められてきた。近隣及び地域センター、子供や青少年グループ、児童福祉学校、高齢者センターなどの利用範囲は広がっている。現場において働きながらより深く研究しようとする人たちのための指針書。

小塩 節著 ファウスト

ヨーロッパの人間の原型
金子晴勇著

B6・一〇〇〇円
近代的自我を主張し、悲劇に生きたファウストを通し、近代人の原型をさぐる。

B6・一六〇〇円
人間とは何か―を西洋思想史のなかでの跡を辿りながら、今日における問題を考察。

関 茂著
西洋思想における人間理解

青年と読書

独学と自立のすすめ

B6・四八〇円
一部エリートの独占行為としての読書を排し、喜び、たのしみを基本条件と考える。

YMCA出版

〒160 東京都新宿区西早稲田2-3-18
電話03(203)0171 振替東京9-68869

編集後記

夏から初秋にかけてのセミナーの生活は、交友館によって一段と豊かであった。本号はその雰囲気を書き記すことをねらいとして、利用者の方々から寄せられた感想文や書簡を紹介させていただいた。共同セミナー一〇〇回に当たり、社会人となった当時の学生や指導された先生方から感想をいただき、私も思い出を新たにしていく。

(能)